

まい 埋やちよ

No. 6

千葉県八千代市

埋蔵文化財通信

1999. 9. 20

(平成11年)

平戸台2号墳特集



市北部の平戸(ひらど)で、この6月末から9月初めにかけて、平戸台古墳群の2号墳の調査を行いました。古墳と言っても既に墳丘(ふんきゅう)は無く、埋葬部分である箱式石棺(はこしきつがん)を中心とした調査でした。石棺の中には人の骨がぎっしりと詰まっていた。上の写真は其中最も状態のよい頭蓋骨(5-131)です。

人骨の中には残りの良いものも多く、副葬品もこの種の石棺としては比較的豊富でした。石棺の蓋がしっかりと閉まっており、中に入った土が少なく、乱され

た様子もありません。盗掘を受けていない幸運な石棺のようです。おかげで良好な資料を得ることができたわけです。今回はこの平戸台2号墳の調査を特集してみました。

なお10月1日から10月31日まで八千代市歴史民俗資料館のロビーで、平戸台2号墳出土遺物の速報展を行ないます。開館時間は午前9時30分～午後4時30分、月曜・祝日は休館です。資料館では企画展「赤土の中の文化～八千代市域の旧石器時代～」を開催中ですのであわせてご覧ください。



明治時代の平戸付近



平戸台2号墳の位置(黒丸)

現在の平戸付近

【平戸台古墳群について】

平戸台2号墳が属する平戸台古墳群は新川を南に臨む台地上、標高約20~21m前後のところにあります。台地縁辺部に5基、台地上のやや奥まったところに4基が存在しました。しかし完全な形で現存するのは1基のみで、その他は崖面に半壊状態であったり、墳丘が削平されていたり、破壊されています。2号墳は台地上やや奥まったところ標高約21.4mのところにあります。

【調査のきっかけ】

2号墳は以前、直径約15m、高さ約1.5mの円墳であったと言われています。後に削平されていましたが、土地所有者がここに納屋を建てようとして石棺の存在に気付き、市に調査を依頼しました。市は平成9年度に確認調査を行い、石棺と弥生時代住居跡を確認しました。この結果をもとに予算措置をして今回の本調査となりました。

【石棺について】

2号墳の石棺は、蓋石3枚、北側の側壁3枚、南側の側壁4枚、東西の小口壁各1枚、床石4枚の合計16枚からなる組み合わせ式です。石材は茨城県筑波山産

の絹雲母片岩(ぬいりいんかん、通称 つば石)です。大きいものは1m×0.8m、小さいものは0.8m×0.5mで、厚さは0.04m~0.12mです。筑波で切り出され、船で霞ヶ浦-利根川-印旛沼を通りもたらされたのでしょうか。古代の香取の海の水運を支配した有力者との親交があったのでしょうか。

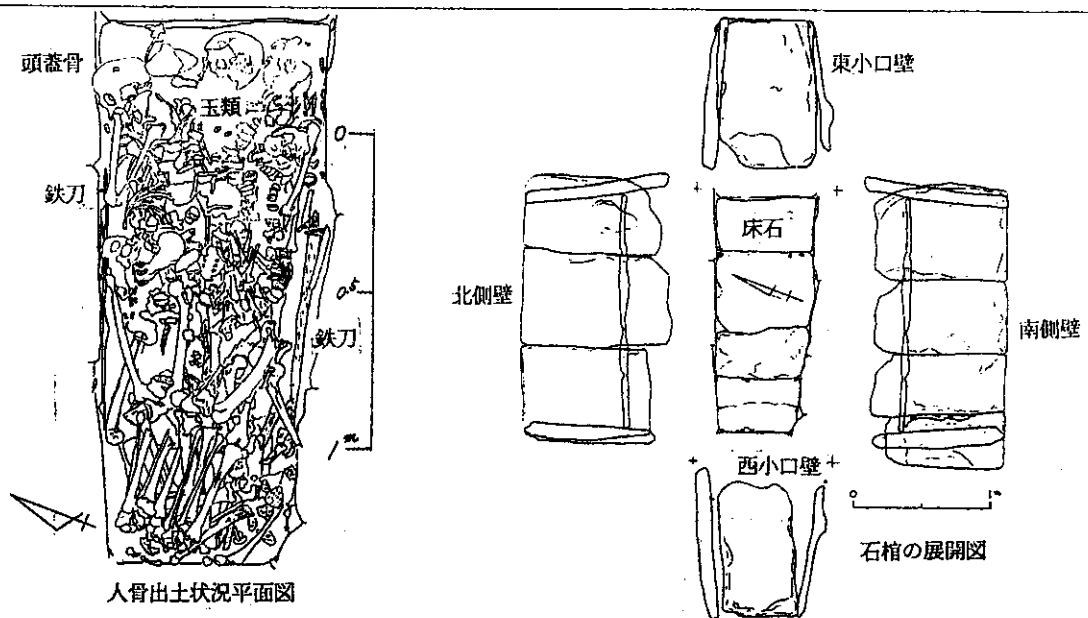
石と石の間は隙間が無いように細かく調整され、さらにその外面には小石を粘土で張り付けています。

床の広さは東側で幅0.7m、西側0.5m、長軸1.73m、深さは0.7mです。

【調査の経過】

蓋石を開けた瞬間、目に入ってきたのは人の骨です。東側には頭蓋骨がいくつか見えており、肋骨、脊椎、骨盤などが重なり合っています。西側には足の骨が束のように並んでいます。正直言ってどこから手をつけてよいものやら、途方に暮れてしまいました。

とりあえず、側壁の石が今にも倒れそうに見えたため角材をはめ込みました。このため写真の見た目が悪くなってしまいました。後にわかったのですが、石が倒れるかもしれない、というのは杞憂で



した。側壁の石は簡単には倒れないようにしっかりと埋めてあったのです。

ひたすら、清掃→写真→実測→取り上げの作業を繰り返しました。人骨の状態の良さに感心したり、取り扱い難さに辟易したりしながら少しずつ作業を進めました。副葬品の玉類や鉄刀などが見えた時は大いに興奮しました。

石棺の内部の調査の後には、石棺自体を調査し、次に石を取り出し、石棺が埋まっていた穴（土坑）を調査しました。土坑を掘り上げた後、土坑の南側に検出された溝（1M）、土坑によって一部破壊されている弥生時代の住居跡（1D）を調査して全体の調査を終了しました。

【石棺内出土品】

人骨は頭蓋骨の数から8体はあったと考えましたが、状態の悪いものなども含まれているため確定はできません。男性・女性・こども（6歳未満）などの骨があるようです。この種の石棺によく見られる追葬（つせう）が行なわれた結果、これだけの人数になりました。人数の確定や性別、年齢などは骨の分析によって明らかになります。それによってこの石棺の被

葬者像に迫れるものと思います。

副葬品は次のとおりです。鉄製の直刀2本は略完形で鏝（つ）付き、刃渡り65cmと70cm。鞘（さや）が木製だったらしく木質がこびりついています。鉄鏃（てつぞく）約10本、刀子（とす=ナイフ）5本、環状鉄製品3個、銅環（どうかん=銅製耳飾り）4個です。玉類は石製勾玉（まがたま）5個、水晶製切子（きり）玉7個、ガラス小玉多数（水色・藍色・青緑色・黄色・赤）、琥珀（こはく）玉です。

【土坑について】

土坑は南北1.8m、東西2.8m、深さは1.1～0.8mでした。底面には側壁を立てるための溝が掘られ、中央部は床石と同じサイズに掘り残されています。

【弥生住居について】

平戸台古墳群があるこの地域は道地（どうち）遺跡の範囲内でもあり、弥生時代の集落跡としても認識されています。住居の平面形は楕円形、炉や柱穴がある典型的なものです。石棺の土坑によって一部が破壊されています。覆土上層にロームまじりの埋土があり古墳築造の際に埋められたものと考えられます。

【溝について】

位置的に古墳周溝の可能性があったのですが、形態から見て近世以降のものと考えられます。

【今後の課題について】

現時点ではまだ多くを語る事ができませんが、整理作業を通じて明らかにしていきたいと思っています。(常松)

墨書白玉

八千代は墨書の
まらだから...

平戸台2号墳では玉類がたくさん出土しましたが、今年の5月～6月に調査した川崎山遺跡h地点では、古墳時代中期の石製模造品(せきせいぞうひん)の製作所跡が見つかり、滑石(かっせき)製の白玉(うだま)が出土しました。今年は玉にご縁があるようなので、墨書土器の中に「玉」はないかとさがしてみました。すると、ありました。



これは平成9年度に調査した池の台遺跡d地点(萱田)で発見されました。平

安時代のもと考えられる2号住居跡から出土した土師器に書かれていたものです。「白玉」は文字通り白い玉の意味以外に、愛児・愛人、真珠などの意味があり、『万葉集』にも多く見られる言葉です。「白珠」と書くこともあります。万葉の歌の中では「大事なもの」「いとしいもの」の意味がこめられていたようです。現在では甘味処あたりでお目にかかるものがまっさきに思い浮かんでしまいますよね。

池の台の「白玉」の文字は楷書でしっかりとした筆跡です。これを書いた古代人は、いったい何を頭に描いていたのでしょうか。(常松 成人)

【訂正のおしらせ】

5号page-2「2つの青い装飾品」の中で「ヒスイ」としたものは、「軟玉(なんぎょく)質の石」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。この石材の鑑定については、和洋女子大学名誉教授 寺村光晴先生、流山市教育委員会 小栗信一郎さんにご教示をいただきました。記して感謝いたします。

編修後記

今年の夏は本当に暑かったですね。そして私たちは平戸で熱くなっていました。調査中、地権者の中台さんをはじめ平戸の皆様、市職員や専門家の皆様には励ましをいただいたり、種々ご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

埋(まい)やちよ No.6

千葉県八千代市埋蔵文化財通信一
平成11年9月20日発行

編集・発行 八千代市教育委員会 生涯学習部
社会教育課 文化財係
八千代市大和田138-2
☎276-0045 ☎047(483)1151 (代表)